

海を見ていたジヨ一

大日本演歌党 帝国陸軍喇叭集 夜明けのラグタイム

素敵な脅迫者の肖像 怨念コマソン館 優しい人びと

浅の川暮色 赤い広場の女

風の柩



五木寛之

ユニコーンの旅

ユコーンの旅

文藝春秋

ユニコーンの旅

五木寛之作品集 17

1973年10月20日第1刷

著 者／五木寛之

発行者／檜原雅春

発行所／株式会社 文藝春秋

〒102 東京都千代田区紀尾井町 3

電話（代表）03-265・1211

印刷所／凸版印刷株式会社

製 本／大口製本印刷株式会社

定価 470円

© 1973 Hiroyuki Itsuki Printed in Japan

0393-512170-7384

万一落丁乱丁の場合はおとりかえ致します

五木寛之作品集第十七巻／目次

海を見ていたジョニー

5

優しい人びと

33

風の樞

55

赤い広場の女

87

素敵な脅迫者の肖像

103

大日本演歌党

129

怨念コマソン館

155

帝国陸軍喇叭集

177

夜明けのラグタイム

203

浅の川暮色

235

ユニコーンの旅

265

解説 片岡啓治

299

ユニコーンの旅

装幀／養老正也

レタリング／原アト・アクチュアル
カバー・表紙カット／エドワルド・ムンク「叫び」より

海を見ていたジョニー

△一九六七年二月發表

1

少年の目の前に、ぬっと褐色の手がさし込まれた。

「やあ、ジュンイチ」

喉からでなく、胸の奥からひびく柔かい低音だった。

こんな声は誰にでもだせるものじゃない。白っぽい指の腹を見せて、握手をもとめている黒人の手。

へだれだろう？ まさか——

少年は一瞬たじろいだ。その動揺を見ぬいたように、優しい声やさやが囁いた。

「やあ、ジュンイチ。かえってきたよ。わたしだよ」

カウンターの中で、うつむいて氷を割っていた少年は、おそろおそろ顔をあげて相手を見た。

「ジョニー！」

「そうだ。しばらくだったな」

目の前の手を握ろうともせずに、少年は口をわずかに開けて、古い友人を眺める。

ジョニーだ。殺されもせずに、かえってきたんだ。去年の夏、ふっと姿を見せなくなった黒人兵のジョニー。おれのジャズの仲間。

「やあ」

それだけ言うと、そのまま少年は口ごもった。こんな場合に、どう応じればいいのかわからないのだ。お得意の英語も、こうなるとからきし役に立たない。

「やあ、ジョニー」

と、それだけで、後は口の中で何となくごまかす。よくかえってきたな、おれは嬉しいよ、と言ったつもりだ。カウンターごしに、濡れた手で温いジョニーの手をぎゅっと握りしめる。

ジョニーが笑った。コカ・コーラみたいな色をした顔に、まっ白い歯が光った。

「元氣そうじゃないか、ジュンイチ」

「ああ。あんたもな」

「そう見えるかね？」

と、ジョニーが真顔できいた。「ほんとにわたしは元
気だと思ukai？」

「ああ」

「よく見てくれ、わたしを。ちゃんとまっすぐに見るん
だ。さあ」

ジョニーは一歩さがって壁際に立った。真剣な顔だっ
た。まるで銃殺される男みたいながあいに、だらりと両
手をさげ、目をつぶってうなだれる。

少年は驚いて背広姿の黒人を眺めた。米式蹴球の選手
にタックルされても軽くはじき返しそうな、堂々たる巨
体。少し胴長で、腰幅があつて、まるで黒い牡牛みたい
な感じだ。

白っぽく乾いた厚い唇がうごいた。「どうかね？」

え？」

「どうって、べつに——」

「そんなはずはない。わたしは変ってしまつた。そうだ
ろう？」

「そうは見えないけど」

「いや。そうだ。わたしは駄目になってしまつた。すつ
かり変ってしまつたのさ。体中から変な臭いがするし、
それに——」

ジョニーは、ちらと店の奥においてある古ピアノのほ
うへ目をやった。「わたしはもう、ピアノだつて弾けな
くなくなつてしまつたのさ。もう、おしまいだ」

「どうしたんだい、ジョニー」

少年はカウンターをくぐつて、黒人兵の腕を引っぱつ
た。部屋の隅のボックス席へ連れて行き、そこに坐らせ
る。

「酔つてるのかい？」

「いや」

「いつかえてきたんだい？」

「きのうだよ」

「除隊になつたのかね」

「また行くんだ」

「いつ？」

「十日後に」

「一時帰休というやつだな」

「そんなところだ」

「どんなふうだった？」

「なにが？」

「戦争さ」

ジョニーは答えるかわりに、かすかに笑っただけだった。少し気味の悪い笑いかただった。

「しばらく休んでなよ。おれは氷を割ってしまうから」
開店の時間がせまっていた。この辺の酒場は、よその街とちがって正午から商売をはじめなのだ。姉の由紀がやってくる前に、しておかねばならない仕事が増山あった。彼女には危くて、氷を割る仕事はさせるわけにはいかない。姉の由紀は、時どきふっと放心状態になるくせがあった。いつだったか、手首にまともに氷かきを突き立てた事がある。それ以来、少年は姉に氷を割らせるのはやめにしたのだ。

割った氷に水をかけながら、ジョニーはいつたいたというんだろう、と少年は考えた。とにかく、彼が無事でいてくれただけでもありがたい。ある日突然、ふ

っと店に姿を見せなくなってしまい、そのまま二度と現れない兵隊も多いのだ。今夜はジョニーと演奏ができるかも知れない。まったく、ひさしぶりだ。六カ月、いや、彼がこなくなったのが去年の夏の終り頃だから、十カ月ぶりになる。

少年は洋酒棚の端においてあるトランペットのケースに目をやると、無意識に唇をなめて微笑した。

変ったって？ 嘘だ。ジョニーはちっとも変ってやしない。ただ、疲れてるだけなんだ。一緒にじっくりと、誰のためにでもない、自分たちだけのためのジャズでもやれば、すぐに元気をとりもどさだろう。今夜は隣の店の、あの甘ったるいジューク・ボックスを黙らせてやるんだ。ジョニーのピアノと、おれのトランペットの普通の合奏で。

少年の頬に、明るい血の色がうかんできた。褐色の大男は、テーブルの上に顔を伏せて、眠ったように動かなかった。高い通風孔から、初夏の光の縞が床にのびていた。少年は体を動かしながら、ジョニーと初めて会った晩のことを思い出そうとしていた。

あれは今から一年以上も前のことだ。少年はトランベットのケースをさげて、海ぞいの遊歩道を歩いていった。港の一部に細長い公園があり、その公園と海との間に広い道があった。

あたりは暗かった。海のほうから、四月の生温かい湿った潮風が吹いていた。街は眠っており、公園の中にも、道路にも、人影はなかった。

少年は立ちどまって海を見おろした。道路の端から数メートル下に、黒く揺れ動く水面がある。その水面に接して、せまい四角な石畳みが波に洗われていた。道路から石段を降りてそこへ行けるのだ。干潮の時は、石畳みは乾いていた。だが今は、石段の途中までしか行けない時間だ。この遊歩道には、いくつかのそんな場所があり、そこは少年にとって、いちばん安心できる場所だった。人目につかず、どんな音を立てても文句を言われる気遣いもない。海水のビタビタと鳴るつばや泣きと、潮風と、貨物船や

タンカーのシルエットと、そして安物のトランベットと自分だけだ。

深夜、少年は楽器のケースを抱えて、そこへやってきた。姉と二人でやっているスナック・バーを閉めるのが二時だから、後始末を済ませてくると、いつも二時半過ぎになる。

「あんた、自分に才能があるとも思ってるみたいね」と、姉の由紀は皮肉な言いかたをした。

「その年になって、女の子よりジャズに夢中というのは、何だかおかしいわ。セックスなんかには興味ないって顔をして。淳一、あんた少し変なんじゃない？」

少年は自分を変だと思った事はなかった。変なのは姉の由紀のほうだ。二年前に現地除隊して、ずっと日本に住んでいる若いアメリカ人に入れあげて、売上げを片っぱしから貢いでしまう。おかげで仕入れにも苦労するしまつだ。男のほうは、すっかりヒモ気取りで、毎日ぶら遊び暮らしている。

母親は少年が幼稚園の頃、病気で亡くなっていた。税関吏だった父親は、五年ほど前から精神病院に入院した

ままだ。高台の住宅地にあった家売って、港に近い飲食街の一角にスナック・バーをはじめたのは、姉の由紀の思いつきだった。

店の名前をヘビアノ・バーンという。古いピアノが一台おいてあって、客が勝手に弾くようになっていた。

近くのホールに出ているベース弾きの健ちゃんという青年が、仕事の帰りに毎晩やってきた。仲間を連れてきて、好き勝手の演奏をやって遊んで行く。外国船の船員や、キャンプのアメリカの兵隊たちの客の中には、なかなか大したミュージシャンもいた。白や、黒や、黄色や、いろんな人種がヘビアノ・バーンへやってきた。

客たちは三つのグループに分れていた。ジャズが好きな客と、ウィスキーを飲みにくるのと、姉の由紀を目当ての連中だ。

店をはじめた時は、由紀が二十二歳で、少年はまだ中学生だった。それから四年、少年は中学を卒業したが、高校へは進学しなかった。彼はヘビアノ・バーンの仕事と、ジャズが気にいって、それ以外の事は、なんにも念頭がない。

ベース弾きの健ちゃんの仲間からもらったトランペットを吹きだして三年目になる。小遣いは全部、レコードとモダン・ジャズ喫茶につきこんできた。街で女の子を引っかけたり、洒落た服を着たり、スポーツカーに夢中になったりするより、ジャズを聴いているほうが、どれだけ素敵だかわかりやしない。マイルズ・デイヴィス、ソニー・ロリンズ、デイジー・ガレスビー、セロニアス・モンク、それだけじゃない。ディキシードも、ビッグ・バンドも、ヴォーカルも、みんな好きだった。

「気違いっ子」

と同級生たちは、父親の事にかこつけて少年をからかったが、彼は平気だった。皆からのけものにされても、ちっとも淋しくなんかない。健ちゃんは親切に教えてくれるし、ヘビアノ・バーンは少年の城だった。凄い美人で、頭のいい姉貴もいる。

店を閉めて、楽器のケースを下げて、海ぞいの夜の道を歩いている時、少年は何か広い明るい世界へ向って歩いているような気がした。あたりは暗く、犬の子一匹いなくても、彼は雑踏をぬってステージへ急ぐ人気ブレイ

ヤーのような気分を感じるのだった。

その晩、少年が道路から石段を降りて行くと、先客がいた。暗くてはつきりは見えないが、どうやらクラブ婦りのアベックらしい。

「だれかきたわよ」

と、湿った女の声がした。

「平気だよ。気にすんな」

と、男の声が言う。

少年は道路へ上ると、別なステージを探した。もう二カ所ほど、同じような場所があるのだ。一番気に入った所は占領されていたが、別にそこでなくては、ということはない。

もう一つの場所をのぞく。波が軽い音をたてているだけだった。誰もいないらしい。少年は爪先で階段を踏んで、水面のほうへ降りて行く。途中でポケットから出したビニールの風呂敷をひろげ、楽器のケースをそつと置いた。へ今晚は吹けそうだ」

そんな気がした。階段で少し脚をひらき、猫背の姿勢でトランペットを唇に当てる。バルブの弾力を指に感じ

ると、体の奥でもう音楽が流れはじめた。まずブルースからやってみる。赤字がかさみだした店のことも、精神病院の父親のことも、男に嫉妬して睡眠薬を飲もうとした姉のことも、何もかも、ずつと遠くへしりぞき、今はただ生きもののようなメロディーが脈うってくるのを待つだけだ。

二、三曲吹きおえた時、頭の上で不意にゆっくりした拍手が起った。

「ブラボー！」

少年は顔をしかめて、そちらを振り返った。道路の上から黒い大きな影が、手を叩きながら、ゆっくりと階段を降りてくる。

「だれだい？」

と少年はきいた。返事はなかった。黒い影は嘘みたくに大きく、真黒に見えた。

「ハロー」

と、その男は柔かい低音で言った。「ハロー、小さなデイヴィス君」

「何か用かい」

と少年は英語で言った。外人客を相手にカウンターの中で覚えた生の英語だ。「おれは酔っぱらいの相手なんかしてるひまはないぜ」

「酔っぱらってなんかいないさ」

「そうかね」

「そうだとも」

「じゃ何だい」

「まあ、そうがみがみ怒鳴るなよ」

と大男は静かな口調で言った。「そばに坐っていいかね」

少年は黙っていた。相手は黒人の大男だ。駄目だといった所ではじまるまい。ゆずられるほどの金も持っていないし、怖いことなんかありはしない。いや、ひょっとしたら――。

少年は振り返って、うしろに拡がる夜の海を眺めた。妙な真似をしかけたら、飛び込んで泳いで逃げるだけだ。まだ水は冷いだろうが、バックを取られるよりましだ。

少年はこれまでも、何度か外人客に変な誘惑を受けた経験があった。思いがけないような上品な客の中にも、

ホモは沢山いた。ベース弾きの健ちゃんも、海兵隊の将校に追いかけてられて苦労した事があつたらしい。

「いつから吹いてる？」

とその男がきいた。

「三年前から」

「なかなか旨いじゃないか」

「そうかい」

「いちおうブルースになつてるよ」

少年は少しむっとした表情で、男を見おろした。男は煙草に火をつけた。褐色の異様な顔がぼうっと浮び上った。男はよくひびく底深い声で続けた。

「だが、君はブルースとは何か、という事を知らないで吹いてるな」

「ジャズは言葉じゃない。感じてるままに吹けばいい。そう誰か偉いのが言ってたぜ。音楽は理屈じゃないだろ」

「そうだ。だけど君は日本人だ。黒人じゃない」

「だからブルースはやれないって言うのかね」

「そんな事じゃない」

「じゃ、なんだ」

少年は、その黒人の大男の隣に腰をおろして言った。

「聞こうじゃないか。あんたの考えを。一席ぶつてみた
いんだろ、え？」

「よし」

と、男は言つて煙草を海に投げた。赤い火が弧を描いて飛び、黒い海に消えた。遠くに貨物船の舷灯がいくつも見え、粘つく風が吹き、あたりは静かで、世界中で目を覚めているのは、その大男と自分と二人きりのような気が少年にはした。柔かい低音が続いた。

「おれたち黒人は、感じたままに吹いてブルースになる。だが、君たちは外国人だ。ブルースってのは何か、という事を考え、理解しなきゃ本当のブルースをやることはできない。わたしはそう思うね」

「じゃ、ブルースっていったい何だ？」

「悲しい歌がブルースだと思つてゐる奴がいる。黒人の悩みと祈りの呻き声だと書いてある本もある。だが、それは違うな。ブルースって音楽は、正反対の二つの感情が同時に高まつてくる、そんな具合のものさ。絶望的でありながら、同時に希望を感じさせるもの、淋しくい

明るなもの、悲しくいせに陽気なもの、悲しくいせにふてぶてしいもの、俗っぽくつて、そして高貴なもの、それがブルースなんだ。その所をしつかり掴まえないや、本当のブルースはやれない」

・少年は黙っていた。男はわかりやすい、はっきりした英語で、ゆっくり喋った。学校の先生か、それとも牧師だろう、と少年は考えた。

「あんたの名前は？」

と少年は聞いた。「兵隊かい？」

「ジョニーと呼んでくれ」

と男は言った。「野牛のジョニーと言う奴もいる。座間のキャンブから時どきこの街へ出てくるんだよ」

「おれはジュンイチ。十七だ」

と少年は言った。「公園の向こうの街で店をやつてゐる」

「君が？」

「姉にも手つだつてもらつてゐるがね」

少年は少し得意気に笑つてみせた。「いまに商売をやめて、ちゃんとしたミュージシャンになる積りさ」

「それはいい。だが——」